

保育カンファレンスの検討 II

—ひとりの保育者の変容・自己理解から自己洞察へ—

○上坂元 絵里 田中 三保子 吉岡 晶子 伊集院 理子 中村 美智子 佐藤 寛子
 榊田 正子 田中 都慈子 (お茶の水女子大学附属幼稚園) 田代 和美 (お茶の水女子大学)

1. はじめに

保育者として、初日からクラスを担当、わけのわからぬまま必死でかけずり回るスタートだった。そして目を重ねるが、子どものそばにいながら子どもの気持ちがわからない、私の保育はこれでいいのか、という思いを持ち続けた。反省ばかりするが、なかなか前向きに保育できなかった私が、カンファレンスに参加したことで、どのように自分の課題をとらえなおしていったか、私の自己理解、保育の姿勢がどう変わっていったかを明らかにしたい。

2. 方法

カンファレンスとしては、1回約2時間の話し合いを月1~2回行った。期間は94年5月から97年1月までの約2年9カ月、メンバーは、学級担任6名、副園長、非常勤職員1名、それに保育関係の大学教員1名の、計9名である。メンバーのひとりである私が、以下のやり方で自分自身をできるだけ客観的にとらえなおし、メンバーと共に考察する方法をとった。①カンファレンスの場での自分の気持ち、変化と感じたことを思いおこす。②【提出した事例・感想】【テープ記録】【テープおこし記録】【自分の発言の抜書き】を読み直し、聞き直しする。③他のメンバーがとらえている私の変化、気づいたことを聞く。

3. 経過 (カンファレンスの経過は下線部分で示す)

(1) はじめての事例を出す (95/2/13)

話したい人が、悩みや気になる子どもについてなど話題を出す、保育の場で全員が共通理解していた方がよいと思われる話をする、ということが1年近く続く。私は、具体的な話題を自分から出すことはできず、自分のことを殆ど話していない。しかし、保育経験が10年以上ということもあり、もっと発言しなくてはとプレッシャーを感じている。

研究主任(A教諭)の提案から、カンファレンスの時間を1回さいてそれぞれが書きたいことで記録を書いてみることになる。私は「新しい素材の提供」というテーマで、子どもが初めて使うブロックを出す際の、保育者の気持ちを主に書いている。子どもの現状に対して、もっとこうなって欲しいという保育者の願いが、全面に出ている。

(2) 野球の事例 (95/7/21・10/18)

新しい年度に入り内容形式とも自由に、2度目の記録を出し合うことになる。私は、年長児のルール性のある遊びへの対応というテーマで、野球の事例を出している。事例について、【1回目の話し合い】【テープおこし】【テープおこしをしての感想】【再度の話し合い】と、4回の検討の機会を持つ。しかし、結果として私の中には、話し合いを重ねた意味があまり感じられなかった。理由としては、事例として本当に話したいと思っていることは別にあるが、

それを出すのをためらっていたためと考えられる。それは、いろいろ聞かれて答えられるだろうかと、自信がなかったからだと思う。現実には事例を出し話し合うことで、今の自分のありようを不本意な形で表明することになった。テープおこしをした感想では、「私の課題意識がやや弱く、話題に対する私自身の積極的な意見が少なかった」と書いており、もっとしっかりと保育観をもった自分でありたいと願っていたことがわかる。1月に、1年間のカンファレンスをふりかえって書いた時にも、「もっと自分をしっかりと出すようなケースが出せるように」と反省している。自分を出したい、聞いてもらいたい、いろいろ言ってもらいたいと望んでいるが、今の私はありのままに出したくないと、気持ちが揺れ動いていた。それで、結果としては研究主任の「保育者の心の動きが読みとれない事例は話としては深まりにくかった」となってしまったのだと思う。

(3) おかえりのこと (96/2/15)

カンファレンスを重ねてきたことが、保育に具体的にどう選っていったのだろうという話の中で、ふと今日あった場面を話したくなる。おかえりの片付けの時に、今までと少し違って、子どもの心の動きがずっと感じられたという心地よさを体験していた。それをカンファレンスの場で話したいと、初めて、ごく自然に思ったのである。

(4) 95年度 最終回 (96/3/18)

A教諭に2/15のことを、「ああ、そういえばこんなことがあったということをお話したいな、とまず思ったのだと思う。それはどんな話をして聞いてもらえる、共有してもらえるという思いもあったからだろう。保育者自身も育て来たということでは」と言われる。私としては、何か言うときに、人がどう受けとめるかに過敏でなかなか素直に話せなかった。それが、自然にその日の保育場面を話せるようになって嬉しかった。ここで大きく気持ちが楽になっている。この後、「共有できる主観」「共通理解の部分」といった話になる。しかし、私にはどこか話についていけない、自分だけはそのレベルになっていないという思いがまだある。12/22に事情で欠席したので、後からその記録を読み直し、継続して参加する大切さも再認識する。

(5) 遊びのはじまり (96/7/17)

新たに3才児を迎え、3度目の事例を出す。入園後、はじめのものを作りたいと言いだした子どもへの、保育者の対応ということで書く。保育の中で「作る」ことを大事に考えたいと、ここでもテーマ性のある事例を出している。「作る」ということへの自分の考え方に今ひとつ自信がない、でも、5才までを見通して3才のこの時期にしっかりとやりたい、そのために他の人の考えを知りたい、私なりの

考え方の変遷があるが、今の考え方でいいのか確認したい、このような気持ちがあつて事例を出したと思う。話し合いでは、メンバーが私の意図をくんで、それぞれが「作る」ということで、何を大事に考えているかが話される。事例に示した私の考え方も認めてもらえる。しかし、子どもとのかかわりを通して保育者の姿勢が浮き彫りにされるような事例を私は出せていない、いや、他のメンバーが【ひとりの子どもにむきあつた事例】を出すなら、私は【テーマ性のあるもの】を出すところだわりを持って主張したい、この様な矛盾した思いをかかえて、まだ悶々としている。

(6) カンファレンスに関連した別の場で

a) B教諭の言葉 (96/10/22)

10/16の回で、なぜ私が個人の事例を出せないのかという話題が出ていたが、同学年の担任で新人のB教諭は、その回欠席した。後からテープを聞いた感想として、「私はE先生に支えてもらっているのに、まだE先生の支えにはなれていない。支えがあつてこそ言える。そのことに周りが気づくべきではないか」と、私に話してくれた。この言葉は、当日の話し合いとは違う視点でとらえたとても暖かいもので、逆に私が支えられているとの実感が持てた。

b) 教頭・研究主任との3人での打ち合わせ (96/11/22)

再度、私が事例を出すことになっていたが、どういう事例が出せようかというA教諭とのやり取りで、私は「気になる個人のこと」を書けばいいと、とらえており「私との関係で～」ということは、あまり意識していなかったということがわかる。また、私が話した言葉から、今までの経験をふまえて3才は5才までを見通していろいろやるべきことがあるはず、もっと気づかなくてはどういう、経験を重ねたが故の、過剰な反応をしているのではと言われる。さらに自分のことを「過渡期にいる私」と表現したことから、私には理想の保育者像があり、まだそれに至っていないという意識を持っているのでは、ということと言われる。私の性格、傾向を十分にくんで、次の回に向けての話がなされ、気負いがなくなり、非常に気が軽くなる。

(7) N男の事例 (96/12/4・12/24)

今一度、保育者とひとりの子どもとのかかわりという視点で、今まで私が出せなかった個人に焦点を当てた事例を出してみるようになっていた。毎日の記録から、自分の中になにかひっかかるN男のことを出す。ここでは気負いなく事例を出せ、今までに比べて、素直に自分のN男に対する気持ちを話せる。「N男は変わってきてる」と言われ、そうかもしれないと思い、また、自分のとらえとは違った思いがけぬ意見を聞き、はっとさせられ新しい気づきがある。テープを聞き直してみると、自分は変わらずに、N男のほうに変わって欲しいと、いかに願っていたかがよくわかる。しかし、今までの私とN男とのかかわりは認められ励まされて「焦らなくていいのでは」というメンバーの言葉で気が楽になっている。また、話し合いの最中はなんとなく聞いていたいろいろなとらえ方も、非常に示唆に

富んでいると改めて感じる。その後の保育の中では、今までよりもN男の顔が幼く感じられ、いざこざの場面などでN男の方が心を寄せようとしているのが感じられるようになる。そうなると、気になることが減り、N男も素直にいられることが多くなったと思う。A教諭の「変えなきゃ、変わって欲しいが前に出なくなった」が実感である。

4. 考察

経過に沿って、私の変化をらえ直すと以下ようになる。

(1) 自分の保育の核となるようなものを持たず、自信がないがそれを素直に言えない。新人ではないし、それなりに意見は言わなくてはと重圧を感じているが、殆ど発言していない。(2) 事例を出すことで、今の自分のありようを表出してしまふ。(3) 自然に保育場面を話したくなり、これが保育に還った、ということかと感じる。(4) 他のメンバーが「共有主観」と共感しているが乗り切れずに、変わらない自分をまだ強く感じている。(5) 自信がない私を認めてもらいたい、経験者として先を見通してやりたいと、両方の間で自分を苦しめている。(6) a) 「自分が変わらなくては、言えるようにならなくては」という重圧から解放される。b) 防衛しているつもりでも、こんなにも本当の私をわかっている、自分で気がつかなかったことに気づかせてくれる、もっと素直になったらもっと自己洞察できると感じる。(7) 今までよりも素直な自分で参加できる。

自分では(6)以降の変化を顕著に感じているが(1)～(5)の過程にもそれぞれ、私の変容があつた。変容の理由として、①カンファレンスの場が何の強制を受けることもなくそのままに参加し続けられるものだった、②この場も、それぞれのメンバーも変容し、お互いに支えあえる関係になった、③自分にじっくりとむきあう機会を持てた、④発表に際し、客観的に、繰り返し、共に考えることを通して新しい気づきがあつた、以上4つのことがあげられる。

私自身、自分を見つめる機会は多く、自分のことはかなりわかっているつもりだった。だが、今回の考察は、「自分で意識していない自分」「変わっている自分」に気づく貴重な機会となった。それは、「自分がとらえている自分」が広がった、深まったということだと考える。その結果、①自分に関しては、いやな面を素直に受けとめられるようになり、柔軟になったと感じる、②保育に関しては、前向きになり子どもの良さが感じられて、前より楽しくなった、③日常の生活では、いろいろな人の話や言葉が前よりも心に響くようになった、ということを感じている。

カンファレンスと私ということ考えてようと思った時、正直なところ、私は自分にこんなに変化があつたとは思っていなかった。始めは大変だったが、途中からは大変さよりも新しい自分と出会える、自分が開かれていく喜びの方が大きくなった。私は私らしく保育していいと思えるようになり、子どもの気持ちが浸みこんでくるようになった。今の私があるのは、カンファレンスの場があり、支えあえるメンバーがいたからである。